

私たちの故郷「仁方」の誇り

＜仁方の地名の由来と誇り＞ 昔は新潟村、新田村と言い、1523（大永3）年に仁賀田と書かれ、後に仁賀多、にがた、二加田村となり、1624（寛永元）年頃から今の「仁方」村と記すようになり、1907（明治40）年「仁方町」となりました。

仁方は、東西北の三方を山に囲まれ、南は瀬戸内の海が開けており、雨量は少なく気候は温暖で、素晴らしい自然に恵まれています。仁方に住む人々は、賢くて人柄が良く勤勉で「ものづくり」に取り組み、塩・ヤスリ・酒・醤油醸造など他に誇れる技術を磨いてきました。

更に特筆すべきは、仁方には昔から文人が多くいて、俳句や和歌が盛んで、芭蕉塚や玉垣に多くの俳句が残っており、江戸時代の文化面で進んでいたことが分かります。そして江戸から明治に移り、近代教育が始まりますが、仁方小学校は屈指の優秀校と高く評価され、明治42年には文部大臣から賞状を受け、他県からの参観者が多く訪れています。

このように仁方は江戸時代以降「ものづくり」「教育・文化」と誇れるものが多くありますが、これらは現在の仁方の人々に脈々と引き継がれています。仁方のみなさん！ふるさと「仁方の歴史」名勝・史跡を見て回って、仁方のことをもっと知って、仁方のことをもっともっと好きになって、明るく住みよい町をみんなで作っていきましょう。

仁方地区まちづくり推進協議会

＜仁方のものづくりと文化財＞



「仁方塩田の図」沖本富正画伯絵（入船山記念館）

しお
塩

1691（元禄4）年 塩浜（現在の棧橋通）で塩の製造が始まりました。初めは苦心しましたが、その後改良して呉、川尻、黒瀬などからの購入者があり、仁方村は近郷中唯一の繁華地と言われるようになりました。陰暦8月15日には岩倉神社（現八岩華神社）の例祭で相撲を見て、帰る時、塩を買う者300人以上でした。「広は三千石、仁方は小村、仁方こもても浜がある」とうたわれていました。

藤の浦にあった塩浜の守護神「稻荷神社」は、1943（昭和18）年仁方港建設のため八岩華神社境内に移されました。

とくさん 特産仁方ヤスリ

仁方と言えばヤスリ、ヤスリと言えば仁方。1824（文政7）年に大阪で製造法を学び仁方で始まりました。その後製造に、刀鍛冶の秘伝をもちい、その地金、鍛練、目立、焼き入れにその技術と行程を設立て立派な製品が出来上がるようになりました。明治40年代になり、目立機を考案することによって生産高は飛躍的に伸び、新潟県を抜き日本一になりました。このように明治から大正時代に画期的な技術革新、動力化により、仁方ヤスリは隆盛の一途をたどり、その後仁方の産業の中心にあって、「仁方千軒、ヤスリ五百」とうたわれました。昭和になっても生産高は増加し1935（昭和10）年には全国生産高の50%を超えました。戦時中、戦後の紆余曲折はありましたが、

その後も仁方のヤスリ生産は、常に80%以上の圧倒的なシェアを誇り、長い間仁方の屋台骨となりました。

近年は需要構造の変化により、需要は減少していますが、今でも仁方ヤスリは国内生産の95%を占めています。

また、仁方ヤスリは、ヤスリ製造の設備と技術を活かして、関連製品の開発を進めており、ヤスリと関連製品の売上高は、ほぼ半々になっています。

さけ 酒と醤油

自然に恵まれた良質の水と人の情熱があって、仁方の特産品である酒と醤油が醸造されています。

酒造は1832（天保3）年に始まりました。1895（明治28）年の記録を見ると、広島県の上位10位中に仁方の酒造が5軒も入り、広島県の酒造りの中心は仁方でした。

その後戦前戦後の変遷などがあり現在では、軒数・石高とも減少しましたが、高品質の酒造が続けられています。

醤油は1844（弘化元）年に始まり、明治時代には賀茂郡第1位の醸造高を誇っていましたが、戦時中の醤油統制の影響があり、戦後は大手メーカーの量産体制等の影響を受けることになりました。仁方の醸造家も共同で経営努力を続けたものの、現在では少なくなりました。しかしここでも酒同様仁方のものづくりの伝統は守られており、高品質の醤油を醸造しています。

せっ 石 灰

石灰の製造は1871（明治4）年に白岳山の石灰石で始まりました。石灰は漆喰（塗壁材など建築材）用として使用されていましたが、その後水田の害虫を除き、稲もよく育つことが分かり、稲作農業に欠かせない肥料として製造されました。郷原、黒瀬、東広島方面はトラックで、広島方面は専用船（幸運丸）で宇品港に出荷されるなど繁盛していましたが、化学肥料の出現や石灰石の減少により、1956（昭和31）年頃廃業しました。当時、白岳山から工場（錦町）まで石灰石を運ぶ、トロコケーブルカーは「仁方名物」といわれていました。



や いわばなじんじゃ 1 八岩華神社のクスノキ 呉市天然記念物

八岩華神社の境内にあるクスノキの大木は、芸藩通志によれば、八岩華神社が移設される前からあり、その兄弟樹は明治初期、厳島神社の大鳥居に献木されていると記載されています。



あみ 21 ぼら網

1759（宝暦9）年から始まり最盛期は昭和時代。仁方で最も特色あるぼら網と言われた漁法は、一隻の地引網を中心に20名以上が船団を組んで待機します。山の2箇所の見張り小屋から「東方から回遊して来るぼら」の知らせを受けて、待機していた船団は、約300メートルの地引網でぼらを囲み、海岸に引き寄せて捕獲するというまことに勇壮なもので、一網打尽にしたぼらの数は1981（昭和56）年5月18日に5万5千の記録があります。

大漁の時網引きを手伝った者には、ぼらが配られました。



「仁方ぼら網大漁の図」長岡強画伯版画（入船山記念館）

いそじんじゃ 22 礧神社

礧神社は室町時代の1463（寛正4）年、時の武将、白井水軍の白井雅楽頭の勧請によって創建され、その後もたびたび改修したといわれています。神殿には、白井水軍の守護神「礧明神」を祀っていますが、神社由来によると、海運漁業の守り神の住吉明神を祀ったもので、住民の護り神様として崇拝されてきたようです。



くんそう 23 ウバメガシの群叢



礧神社の境内には、約200本ものウバメガシの群叢が見られます。呉市近郊には、このようなウバメガシの自然群落はほかに見当たりません。境内だけでなく、後背地も含めて、稀少な自然群落として文化財の価値があります。

ふながたいし ちょう す ばち 24 舟形石の手水鉢

礧神社境内には全国的にも珍しい花崗岩の自然石でできた舟形石の手水鉢があります。その昔、船出の時にこの石を動かして、その日の豊漁や吉凶を占ったという言い伝えも残っています。



み どう け し り ょ う らんがく し り ょ う 25 三刀家史料（蘭学資料）

呉地方ただ一人の適塾（＝緒方洪庵 福沢諭吉と永い交流があった）の塾生、医師三刀寛一郎が収集、筆録したもので、幕末期の近代医学導入の推移や芸州藩が分かる史料（医学書等223冊、書簡等95点）からなっています。寛一郎は仁方村に帰郷後も芸州藩軍艦付として同藩初の船医の一人となりましたが、終生、医師として活躍を続けました。



かいおど 32 櫓踊り

仁方大東地区に残っている櫓踊りは明治初期から始まりました。盆、祭礼、祝い事など船乗りの人々を中心に継承されてきた呉市の無形文化財です。



写真（呉市教育委員会）